

卷之二

Tome Second

ツークツワンク

Zugzwang

前編



文・イラスト
東風

ばんしょうのかがみ
万象の鑑



万象の鑑

ばんしょうのかがみ

卷之二

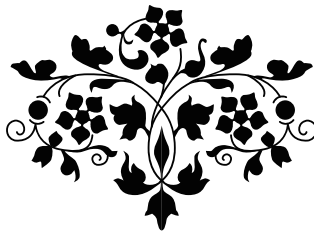
ツークツワンク 前編

ZUGZWANG.

*SPECULUM OMNIS,
PAR UNE SOCIÉTÉ DE GENS DE LETTRES.*

Mis en ordre & publié par M. DUPRÉ & M. D'AUBIGNÉ.

TOME SECOND.



OMNIVERSE,
文・イラスト 東風

MM. X. VIII.

目次

4	疑心と確信	56
3	暗転	38
2	北へ	23
1	雨に煙る	10
	万象の鑑 ツークツワンク 前編	5

万象の鑑
ツクツワンク
前編

瘦せ細った両足が、硬くならかな土をたどたく踏み締めて歩く。疲れ果てては昼夜を問わずその場に横たわって眠り、また走り出しては座り込む。渇きに荒れた喉を、飢えに吐き戻した胃液が焼く。

男はただひたすらに、見も知らぬ荒野を彷徨い続けている——速度も歩幅も鈍って、地べたを這う時間は着実に延びている。遙か遠方に霞む水平線が辛うじて凹凸を描いて見えるばかりで、自分の周囲には身の丈を超える草木や岩石の類は皆無である。頭上で鮮烈に輝く太陽から逃れる術はなく、彼は跪いて背中を丸め、ただ暴虐の光が過ぎ去るのを待った。

地面に膝を突いて俯くと、縮れた髪や髭が垂れ下がって視界を狭くした。背中がじりじりと焦がれるのを感じながら、男は砂粒をぼんやりと眺めた。

(わたしは) (何故……) (こうしているのだろう)

歩みに引き絞られていた心臓が落ち着きを取り戻すと、男の胸中には悲しみの風が吹き荒れた。慰めとすべき像を脳裏に浮かべるには、彼の記憶はあまりにも蹂躪し尽くされていった。人の顔が、愛用した品々が、長く暮らした土地の風景が。みな風雨に晒されたようにその面影を削ぎ落とし、曖昧に掠れさせている。

(誰か) 頭痛がした。(助けて……)

(——^た譬えるなら、彼は太陽だった。誰もを等しく包むべく光り輝く一方で、悪しきものを滅ぼさんとする苛烈な炎でもあった。光は強まれば強まるほど色濃く影を落として、ありとあらゆる障壁が分厚い雲のように彼の行く手を阻んだ。

その航行には絶対の理があり、光には整然とした根拠があり、熱には弁別があった。だからこそ私たちは、誰ひとりとして彼の道行きを遮らなかつた。

私と彼は、数えきれないほど多くの日々を共有した。そしてそれと同じくらい、分かち合えず譲れもしない感情があった。私たちはその思いのために何度も衝突し、和解し、再びぶつかり合っては融和した。

彼は私の友であり、兄であり、時に半身だった……)

(……思い出せない)

「彼」が誰のことであつたか、男はどうしても記憶を手繰り寄せることが出来なかつた。

(それほどまでに強く思いながら)(わたしは……)(……?)

その刹那、男は自らの内側を奔った違和感にびくりとした。

丸ごと抜け落ちたような空虚。

(違う) (「彼」を太陽と評したのは——) (わたしではない)

(あれは) (わたしの言葉ではなかった……)

失われた人物について思い起こそうとするたび、男の胸は締め付けられたように痛んだ。それは記憶が失われたことの嘆きでも、もう会えないことの悲しみでもない。その感情は、紛れもない嫉妬だった。

(わたしは) (あのひとの兄にはなれなかった) (半身にもなれなかった) (友ですらなかった)

(わたしは) (たったひとりあのひとの隣に並び立つ) (「彼」のように在りたかった……)

「彼」は太陽だった。「あのひと」にそう呼ばれることが羨ましかった。「彼は私の友であり、兄であり、時に半身だった」と——幸せそうに語る「あのひと」の顔が、眩かった。

陽射しが強まることに視界が明滅し、男はやがて意識を失った。





万葉の神皇

1 雨に煙る

空

と木々との色が鮮やかに深みを増す晩春、帝都には決まって寒の戻りが訪れる。過ぎ去った厳冬を再び突き付けような冷たい風に、灰色の雲がうねりながら北へ流れてゆく。

今にも雨が降り出しそうな空の下、とあるアパルトマンの一室には紙を擦る鉛筆の音が絶え間なく響いていた。床を埋め尽くす本の山、瘦せた背中に被った毛布、擦り切れた布の手袋、三日は洗われていないと見える、ぼさぼさの短い金髪——百科事典『万象の鑑』の責任者たる魔術師ジル・デュプレは、その日も原稿の校正に変わらず励んでいた。

大気を濁らせる雨は〈帝国〉魔術師の多くが象徴的に忌避しているが、魔力の統御が利かない「青目崩れ」には悪天候の影響がより顕著に現れる。ジルにとっては、やれ関節が痛むだの、頭痛がするだのと毎日が苦難の連続であった。

事典の印刷が順調に行けば、夏には第二巻が刊行される手筈になっていた。文芸雑誌『新評論』には相変わらず保守的

な学者たちの抗議が載り続けていたけれども、執筆者たちや〈帝国記録院〉の長エルネスト・メルルには予測の範囲内に過ぎなかった。

不意の出来事といえば、出版を行った書店を通じて、数人の若い魔術師から協力の申し出があったことだ。執筆、学術記事の校閲、宣伝に原稿の隠蔽——頼める仕事はいくらでもあったが、人員が増えれば増えるほどジルの仕事も増える一方だった。

ジルが今向き合っているのは、工学者ウーヴェ・アロイス・ゲルトナーが年末に刊行される三巻のために記した「熱Chaleur」の原稿である。

〈帝国〉が起こるはるか昔、熱は冷気や電気と並び、「精霊」という人智を超えた存在が呼び起こすエネルギーの一つと信じられていた。時代が下るにつれ、熱は「非常に高密度の魔力」か、あるいは「目には見えない火の粒子が物質に流れ込んだもの」とする学説が対立した。工学と魔術学とが合流を果たすまで、魔術師と無能力者は五百年以上も互いの理論に無理解だった。

やがて魔導工学まどうこうがくが「自然熱」と「魔力熱」という魔力の介

在の有無で熱を二分すると、熱は「魔力との高い親和性を有する、しかし魔力を保有するとは限らない、高温かつ不可視の流体」と見なされるようになってゆく。

そうした「熱流体説」が主流とされる時代にあつて、ウーヴェは「物質そのものを構成する微粒子の運動」こそが熱の正体とする立場を取っていた。古くからごく少数の学者に提唱されては潰えてきた、思弁的で無根拠とされる説である。

熱という概念が辿った歴史を踏まえ、丁寧な実証とラディカルな仮説によつて、熱流体説の矛盾を突こうというのがウーヴェの目論見だった。陸軍元帥ラウルⅡモーリス・ベルグランを巡る微妙な関係ゆえに、惜しくも実名を事典には載せられないのだが。

数多い事典の執筆者の中でも、ウーヴェの原稿は校正のしやすさがずば抜けていた。彼はジルの魔術構文を概ね心得ているし、ユベール・ドービニエが指揮を執る組版にも理解がある。呪文となるべき要所の語句を書き替えても、違和感を極力抑えるように言い回しが考慮されているほどだった。

検閲官としての仕事場である〈学堂〉の図書館が閉館日であれば、ジルは大人しく休んでいる気にはなれなかった。

書くべきものがそこにあるというだけで、この男は倒れるま

で手を動かし続ける。

だが芯の磨り減った鉛筆の木軸が原稿に引っ掻き傷を付けた瞬間、ジルの神懸かりにも似た集中は不意に途切れた。

「……………」

遊びを中断された子供のようにはばらく唇を尖らせたのち、ジルは机を埋める紙と本の山へ無造作に手を突っ込み、その奥を漁った。

「……………」

「ジル？ どうしたの？」

昼食の後片付けをしていたユベールが、捜し物をするジルに気付く。

住み込みでジルの介添人を務めるこの青年が、『万象の鑑』のもう一人の立役者である。空色の瞳の傍らで緩く波打つ栗色の前髪が揺れて、清潔感のある装いはジルとは対照的に爽やかだ。

ジルは塗装の剥げたブリキの角缶を引っ張り出すと、徐に中身を逆さまにした。何やら黒ずんだ葉の破片がぱらぱらと落ちたきり、缶は空っぽだった。

「済まん、ユベール。煙草を切らした」

「もう……………残りが少なくなったら言うように頼んでいたでしょ

う？　これから雨が降り出しそうなのに」

ユベールが眉を下げて不満げに零す。煙草はジルの絶え間ない不調を紛らせる必需品の一つである。食器を仕舞い終えるなり外出の支度を始めるユベールを、ジルが止めた。

「自分で買いにゆくよ」

「だめ。あなたを独りで行かせるなんてとんでもない」

「知らない場所じゃあない」

「ウーヴェさんが吸ってるような、普通の煙草なら僕だって何も言わないよ。とんでもない値段を吹っ掛けられて、泣きながら事典の資金に手を付けようとしたこと、忘れたとは言わせないからね」

ジルの方も、まさか忘れていたとは言えなかった。

帝都の外周に広がる貧民街、ノートルヴイルの複雑な地下道を根城にしている売人の類は、伝手がなければその居場所を特定することさえ困難だ。ジルが鼻屑にしているヤニクという男は、情報の手際さと煙草の質とで人気があった。かつて航海の黄金時代の幕開けと共に〈帝国〉へ持ち込まれた南方の幻覚植物は、麻酔薬の発明と共に忘れ去られた現在、もっぱら向精神薬としてこうした地下で取引されている。

「——ははは！　それでお目付役が怖い顔でこつちを睨んでるのか。ご苦労さん」

肌寒い地下だというのに擦り切れた薄着を纏うヤニクは、紙巻きの紫煙を燻らせつつ、隙間だらけの歯を刮いて笑った。

隣で同じように煙草を啜えていたジルの背を気安く叩くと、彼はどこか据わった目付きで咽せて咳込んだ。今のジルの目には、煙草の小さな火すらぎらぎらと輝いて映る。

「げほッ……悪気はないんだ。彼は地下に慣れていないから」
「根っからの坊ちゃんだなァ」

褪せた赤茶色をした、ぼさぼさの長髪から覗くヤニクのぎらついた目玉が、地上へ続く梯子の傍らで見張りを務めるユベールを見た。彼は口元をハンカチで押さえ込んだまま、汚い壁の色合いに似た様相のヤニクを睨み返した。ジルの慢性的な苦痛を和らげる必要悪とはいえ、親しい人間が幻覚剤を摂取する光景は直視し難いものがある。

そうでなくとも、育ちの良いユベールにとって地下道は極めて居心地が悪かった。錆びたカンテラのガラスは蠟燭の火を曇らせ、沈殿する薄暗さが時刻を分からなくさせる。人がすれ違うのがやっとの幅しかない空間に、鼻を突く汚物の臭気が充満している。濁った空気を嫌う〈帝国〉魔術師でなく

とも、まともな神経の持ち主が長居の出来る環境とは思えなかった。

「で？ 今日日は葉っぱだけ買いに来た訳じゃアないんだろ、デュプレの先生」

「ああ、警察が我々のことを嗅ぎ回ってやしないかと思つてな」
そう口にすると同時に、ジルはヤニクの手に銅貨を握らせた。

「毎度。幸いにも、あんたらの名前は上がつてねえよ。だが状況は良かアない。見回りが増えて窮屈だつて、誰も彼もが文句を垂れてる」

「不穏だな」

「タイミングとしちやア、春先に反体制のグループが潰されて以降だ。先生の『書き物』とやらが原因に関わっているかは断定し難い」

狭い天井にか細く響く二人の密談を聞きながら、ユベールは不快感だけでない、どこか複雑そうな面持ちで眉間の皺を深めた。

（やっぱり……ジルは煙草さえ吸ってれば、あんなにがさがさで間延びした喋り方でもちやんと聞き取れるんだな）

ジルは他人の声をスムーズに受け取れないことが多い。魔力の代償により、一度目にしたきり忘れられない文字が脳裏

を逼迫し、^{ひっけ}「聞いた声を頭の中で文字に書き直してから、それを読んでいる」というのが本人の説明だった。だからユベールをはじめとするジルの知己は、まるで老人へ語り掛けるような、はつきりとした発声に普段から細心の注意を払う。

だがヤニクの声と話し方は、お世辞にも明瞭とは言えなかった。

そんな言葉へも滑らかに返答しているところを見るに、ジルの魔力が幻覚植物によって阻害されているのか、それとも逆にジルの聴覚が鋭敏になっているのか——今は事典の編集に心血を注いでいるけれども、ユベールもまた若く意欲的な学者には変わりなかった。

煙草で視野が狭まっているのか、ジルは脇目も振らずにヤニクとの会話を続けていた。

「警官の態度に、何か変化は？」

ヤニクが肩を疎める。「人数が増えただけで、やることなすこと以前と少しも変わらねえ。俺らにやたら食って掛かるわ、目付きが気に入らねえわですぐに殴る蹴るだ。こちらら人畜無害の〈帝国〉市民様だつてのによ」

彼がわざとらしく発音した「市民 chuyuan」の語に、ジルが弛緩した目付きでにやりと笑った。

「本当に、何もしてないんだろうなあ？」



「くひッ！ 笑わせる。金を受け取った情報屋が、嘘を吐いてどうするね？ そりゃあ中には自業自得の野郎もいるかも知れねエが、彼奴ら警官は俺らノートルヴィルの人間より余程ケダモノだぜ。下から疎まれ上からは見縊られ、粗探しがしなくて堪らねえのさ」

〈帝国〉の警察組織は陸軍の管轄下にある。対外戦争が第一の職務である陸軍とは異なり、国内の警察には軍人よりも魔力の低い者が所属するのが通例であり、軍と警察の間に不和が生じるのも必定だった。

「それじゃア先生、銅貨一枚分のハナシはここまでだ。続きを聞きたきや、もう一枚」

歌うようなヤニクが瘦せた掌を差し向けると、ジルはそこに二枚目の銅貨を載せた。金勘定の誤りを危惧するユベールによって、ジルに煙草代以上の持ち合わせがないことをヤニクもよく承知していた。

「よし、続けるぞ。……ついここ数日だ。見回りの警察官の中に、軍人が交じるようになった」

その言葉を聞いたジルが、煙草を吸う手を止める。

「何故軍人と判った？」問いつつ、ユベールを手招く。彼は少し迷ってから、ジルの隣まで遠慮がちに歩み寄った。ハンカ

チで口や鼻を覆うだけでは飽き足らず、努めて息を殺しているのが見て取れた。

「階級も制服も着けちゃいないが、歩き方で一目瞭然だ」

「歩き方？」ヤニクの返答を、ジルが訝しんで復唱する。

「どんなに早足でも、身体の芯がびくともしねエんだ。戦いの訓練を受けた人間は、自然とそうなる。若い兵卒が駆り出されてると見たね」

「その軍人たちも、警官のように高圧的な態度を？」ユベールを避けて煙を吐き出すジルの呂律に、僅かな弛緩が交じった。

「いや。警官と違って、何も口を利かねえ。黙って街ン中を見て回ってるだけだ。俺アそれで奴らが軍人だと確信したし——だからこそ、マジでヤバイ」

ジルとユベールが顔を見合わせた。埒が明かなくなったユベールが、口に宛がっていたハンカチを下ろした。

「……それは恐らく、陸軍の情報将校でしょうね。『視る』ここそを魔術として用いるという……」

息を継いだ拍子に苦い顔をして、ユベールは再び口元をそそくさと隠した。

「ご明察。人と目が合おうが合うまいが関係ねえ。何が見えるんだか知らねえが、彼奴らとつくに何事か読み取って、本部

にでも持ち帰つてははずだ。あんたらの企みも、とっくにバレてたりしてな」

「……警戒するに越したことはないな。警察だけでも油断がならないのに、軍に絡まれば余計に厄介だ」

唇に触れそうなほど焦がした煙草を、ジルは靴底で踏み消した。散り散りになった巻紙は、古い本のページを裂いたものだ。文字を忘れないジルにとって、読み終えた本は〈帝国記録院〉

並みの稀観書でもない限り、徳用の雑紙に等しかった。

「あんたら〈帝国〉をどうにかしようつたって、本書いてるだけなんだろう？」

ジルは平然と頷いた。「ああ。そうだよ」

「ハナシを聞くだけ聞いて手も足も出ないようじゃ、さっぱり期待出来ねえな。……まあ、期待はしねえが、邪魔もしねえ。

俺たちゃ性根の腐った警官どもの相手で手一杯だしよ。何よりあんたら、いい金づるだ」

「何とでも呼べ。私たちは机に齧り付いているのが仕事だからな」

「勝算はあるのかい」

「銅貨一枚。払うか？」にやりとするジル。

「まさか」ヤニクの笑い声が愉快げに裏返った。

「ふふ。では、私たちは雨が降る前に引き揚げるとしよう。有

難う、ヤニク。また来るよ」

踵かかとを返すジルたちを、ヤニクが一拍置いて呼び止めた。

「先生。ちょっといいか」

「何だ？」

「こつから先は売りモンじゃねえ。『煙草屋』の、上客へのオマケだ。あんたらのツレの、丸眼鏡に伝えてくれるかい」

「ウーヴェに？」

「ああ。そいつに重々、気を付けるように言っとけ。軍人なんだか俺らの味方なんだかハッキリしねえと、そのうち警察まで敵に回しちまうってな」

「彼が軍人に見えるって？ ……それも『歩き方の違い』か？」

「長くつるんでる割には、先生も案外モノを知らねえな。本人は無造作を装ってるらしいが、あんだだけ足元がしっかりしてりゃア、とても『工学者』には見えないぜ」

夜中に降り出した雨は、翌日になってもやむ気配がなかった。

宮殿の南西部、祭事に多く用いられる広場を囲むようにして広がる街区は、帝都でも特に裕福な魔術師が暮らす一帯として知られる。住居に宮殿と同じ純白の建材の使用を認められる者はごく少数であり、その一人がラウル・モーリス・ベル

この続きはぜひ本編でお楽しみください！

「私に出来ることなんて何もないよ。でも、行かなくちゃ。彼らが活着ていることを確かめなくちゃ、私は平気では居られない」

「……エアナへは、ここから馬車を飛ばしたって半月は掛かる。あなたには統制局も、事典のことだってあるんだよ」

——「北へ」

「俺が、人殺し？ ちょっと待ってくれ。聞いてたか、俺の話。昨日は——」

「どうやら、昨晚はお疲れでいらした、とのことですからな。多少の記憶違いもごさいますしょう」

——「暗転」

「俺を疑うってのがどういうことか、お前ならよく判ってんだろ」

「ああ。だからこそ驚くと同時に——仕組まれているんじゃないか、とも思った」

——「疑心と確信」

その革命は、
「百科事典」の形をしていた。

ばんしょうのかがみ
万象の鑑

卷之二

ツークツワンク
前編

Tome second
—Zugzwang

文・イラスト
東風

A5判オンデマンド印刷 / 本文72ページ / 価格700円





Omniverse
2018